



筑紫女学園大学リポジット

On Pātrakesarin, a Jaina Logician

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/389

ジャイナ教論理学者パートラケーサリンについて*

宇 野 智 行

On Pātrakesarin, a Jaina Logician

Tomoyuki UNO

0. 序

ジャイナ教論理学において、「パートラケーサリン」(Pātrakesarin) という名の論理学者は極めて重要な学僧と考えられている。彼の名はジャイナ教に限らず仏教論書にも「パートラスヴァーミン」(Pātrasvāmin) として現れ、それらの論書では彼が「そうでなければ説明が見つからないこと」(anyathānupapannatva) という証因の一条件説を説いたということを伝えている。彼に至るまでのジャイナ教論理学は、聖典に説かれたジナの言葉を世間的に説明付けるといった目的の元に、非常にドグマティカルな要請から発展してきた。しかしながら、聖典の内容を聞き手に納得させるという目的を持つジャイナ教の論理的思考¹⁾は、インド思想全体の認識論の潮流に合流しつつ、その論理的整合性そのものについて検証されることとなる。このような論理学そのものへのアプローチの嚆矢として、パートラケーサリンが登場した。具体的には、彼もしくは『ニヤーヤ・アヴァターラ』作者のシッダセーナ・ディヴァーカーラ (Siddhasena Divākara) に至り、証因 (hetu) の特質などの考察を体系的に纏めようという試みが為されるようになったのである。パートラケーサリンが証因の特質を記述するにあたっての狙いは、仏教徒が提示した証因の三条件 (trilakṣaṇa) 説を批判することにあった。特に、以下の韻文はその目的を果たすものとして、極めて著名なものである。

anyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim /

nānyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim // (以下、anyathānupapannatva 韻文)

この韻文の意味や「そうでなければ説明が見つからないこと」という証因の特質については、従来数々の研究がなされてきた。特に、その論理的な構造については、この韻文を引用批判する仏教僧シャーンタラクシタの『タットヴァ・サングラハ』およびその注釈『パンジカー』を利用した

優れた論考が発表されている²⁾。しかしながら、パートラケーサリンという論理学者の生涯や個人的情報については、文献資料をつぶさに検討した上で整理されることがない。これは彼自身の作品が散逸していることや、彼の生涯について語る後代の資料が圧倒的に少ないことにも起因している。

本稿は、(1) パートラケーサリンの個人情報、特にヴィドゥヤーナンディンとの同一人物説についての従来研究を概観し、整理すること、(2) 彼の生涯に関する伝説を記したプラバーチャンドラ著『アーラーダナー・カタール・プラパンダ』(*Ārāḍhanākathāprabandha* : 以下『カタール・プラパンダ』)³⁾の *Samyaktvodyotanakathā* 章の翻訳を提示すること、(3) これらを元にパートラケーサリンの生涯について従来研究に若干の付加をなし、現時点での理解を提示することを目的とする。なお本稿では、従来西洋や本邦の研究者が看過してきた、現代インド語によるパートラケーサリン研究についても可能な限り利用したことを付記しておきたい。

1. パートラケーサリン＝ヴィドゥヤーナンディン同一人物説

近代のジャイナ教研究において、「パートラケーサリン」という名を持つ論師に初めて言及しているのは、管見の限りでは K. B. Pathak であると思われる。Pathak [1892] によれば、パートラケーサリンは『タットヴァ・アルタ・シュローカヴァールティカ』(以下『シュローカヴァールティカ』)『アシュタサハスリー』などの著者ヴィドゥヤーナンダ(ヴィドゥヤーナンディンの別名: 本稿では以下ヴィドゥヤーナンディンとする)と同一人物である。Pathak はジナセーナ(9世紀)⁴⁾の『アーディ・プラーナ』において、アカランカ、シュリーパーラ、パートラケーサリンが並列して言及されていること⁵⁾を示し、この文献の古い貝葉写本にはパートラケーサリンの別名として“Vidyānanda”が記載されていると言う⁶⁾。また、Pathak はパートラケーサリンとヴィドゥヤーナンディンを同一人物と看做す根拠として、『サムヤクトヴァ・プラカーシャ』(*Samyaktva prakāśa*)における次のような一説を提示している。

tathā śloka-vārtike vidyānandi[da] aparānāmapātrakesarisvāminā yad uktam tac ca likhyate
— tattvārthaśraddhānam samyagdarśanam // nanu samyagdarśanaśabdanirvacanasamarthyā
eva samyagdarśanasvarūpanirṇayād aśeṣatadvi[pratipa]ttinivṛtteḥ siddhatvāt tadarthē
tallakṣaṇavacanam na yuktimaḍ eveti kasyacid ārekaḥ tām apākaroti. (Pathak [1892: 222])

当該の『サムヤクトヴァ・プラカーシャ』という文献については、作者、著作年代など詳細は何ら述べられていない⁷⁾。ただし、上記の“nanu”以下はヴィドゥヤーナンディンの『シュローカヴァールティカ』に一致しており⁸⁾、空衣派系の「正しい信仰」(*samyagdarśana*)についての作品と思われる。

さらに Pathak は、ヴァーディチャンドラの戯曲『ジュニャーナスールヨーダヤ』(*Jñānasūryodaya*) 第4章の記述を二人の同一人物説の根拠として挙げる (Pathak [1892: 223])⁹⁾。『ジュニャーナスールヨーダヤ』では、アカランカの著作『アシュタシャティー』(サマンタバド

ラ作『アーブタミーマーンサー』に対する注釈)が女性として擬人化されている。戯曲に登場する女性アシュタシャティーは、ミーマーンサーなどの他学派との論争に直面し、『デーヴァーガマ讃歌』(Devāgamastotra: 『アーブタミーマーンサー』の別名)を引用して説明する。しかしながら、対論者を屈服することが出来ず、パートラケーサリンに助けを求める。

deva tato 'ham uttālitahrdayā śrīmatpātrakesarimukhakamalaṃ gatā tena
sākṣātkṛtasakalasyādvādābhiprāyeṇa lālītā pālītāṣṭasahasritayā puṣṭim nītā, deva sa yadi
nāpālayiṣyat tadā kathaṃ tvām adrākṣaṃ(drakṣyaṃ) / (Pathak [1892: 223])

神よ！今や私の心は満たされております。というのも、私は吉祥なるパートラケーサリンという蓮のような口を持つお方の所へ行きました。全てのスヤードヴァーダの意図を明らかにして下さった彼は私を惹きつけ、守って下さり、『アシュタサハスリー』として力を与えてくれました。神よ！もし彼が私を守ってくれなかったとしたら、どうして貴方を信じられましょうか。

この記述は、パートラケーサリンが『アシュタサハスリー』を著したことを直接述べるものではないが、アカランカの『アシュタシャティー』で充分に説明が足りなかったものをパートラケーサリンの『アシュタサハスリー』が補っていることが暗示されている。事実、『アシュタサハスリー』は『アシュタシャティー』を註釈しており、上記の引用ではその作者がパートラケーサリンと考えられているのである。

Pathak によって唱導された「パートラケーサリン＝ヴィドゥヤーナンディン」という説は、後の研究者たちによっても継承されている。まず、『アシュタサハスリー』の編者 Vamśīdhar は、Pathak 同様『アーディ・プラーナ』に現れる「パートラケーサリン」をヴィドゥヤーナンディンと同定し、根拠を提示しないもののそれには異論がないと断じている (Vamśīdhar[1915: 8])。さらに、『シュローカヴァールティカ』の編者である Manoharlāl もその序文において、Pathak が示した二つの根拠 (『サムヤクトゥヴァ・プラカーシャ』および『ジュニャーナスールヨーダヤ』) をそのまま示し、同一人物説を踏襲している¹⁰⁾。

Manoharlāl はさらに、パートラケーサリンの生涯について、ブラフマネーミダッタ著『アーラーダナー・カター・コーシャ』(Ārāḍhanākathākośa: 以下『カター・コーシャ』)のパートラケーサリン伝の箇所を全文引用し、若干の説明を加えている。『カター・コーシャ』によれば、パートラケーサリンはマガダ地方のアヒッチャトラ (ahicchatra) に住むバラモンであった。Manoharlāl は、アヒッチャトラが「アヒクシティパールシュヴァナータ」(ahikṣitipārśvanātha) という名で知られていた都市であり、現在のウッタル・プラデーシュ州ヴァレリーマンダラにある「ラームナガル」であると同定している (Manoharlāl[1918a: 5])。アヒッチャトラはジャイナ教の第23代ティールタンカラであるパールシュヴァナータが独存知を得た場所として有名であり、現在もパールシュヴァナータの在所として知られている¹¹⁾。つまり、パートラケーサリンは北インドの出身であり、少なくとも『カター・コーシャ』によればジャイナ教に改宗以前は北インドに居住していたことになる。Manoharlāl はこの点について、カルナータク州のシモーガー

(śimogā)にあるフマチャ (humaca) という村の碑文の記述と齟齬を来すことを指摘している¹²⁾。つまり、この碑文はヴィドゥヤーナンディンがカルナータク州に住んでいたことを示唆しており、北インド出身であることと矛盾するのである。この事実に対して Manoharlāl は、彼はマガダ地方に生まれて、後にジャイナ僧となって遊行しカルナータクへ到達したとして解決を図っている (Manoharlāl[1918a: 5])。

このブラフマネーミダッタの『カター・コーシャ』を根拠としてパートラケーサリンの生涯について考察する手法は、Jinadās Śāstri によって全く同じように踏襲されている。この『カター・コーシャ』のパートラケーサリン伝は、後に訳出する『カター・ブラバンダ』の内容とほぼ一致するので詳細は割愛するが、Jinadās Śāstri は初めてこの文献の当該箇所を纏めている (See Śāstri, J.[1921:4-6].)。彼の記述を参考に『カター・コーシャ』のパートラケーサリン伝の概要を示すならば次の通りである。

- (1) パートラケーサリンはアヒッチャトラに住むバラモンであった。
- (2) 彼は聖者チャーリトラブーシャナの吟じる『デーヴァーガマ讃歌』を聞いて感銘を受ける。
- (3) しかし、推理の特質についての疑問が湧き上がる。
- (4) するとパドマーヴァティー女神¹³⁾がやって来て「明日の朝、パールシュヴァナータ像を見れば推理の特質についての決定知が生じるでしょう」と彼に告げる。
- (5) 翌朝パートラケーサリンがパールシュヴァナータ像を見に行くと、その後蓋¹⁴⁾に anyathānupapannatva 韻文が刻まれているのを見る。
- (6) これにより推理に関する決定知を得たパートラケーサリンは正しい信仰を得るが、他のバラモンたちはミーマーンサーなどの教えを捨てたことを批判する。
- (7) 彼らに対してパートラケーサリンは、ジナの教えが他の教えよりも優れていることを示し、論争によって彼らを負かす。
- (8) さらに彼は、他学派の見解を論駁する『ジネンドラ・グナ・サンストゥティ』 (Jinendraguṇasamṣtuti) という書物を著し、彼の正しい信仰を外に示す。
- (9) アヒッチャトラのアヴァニパーラ王をはじめとする人々は、彼の正しい信仰を見て、他学派の教えを捨て、ジナの教えに専心するようになる。

この『カター・コーシャ』の記述で最も重要な情報は、パートラケーサリンがパドマーヴァティー女神によって、anyathānupapannatva 韻文を知ったということであろう。パールシュヴァナータ像の後蓋に同韻文を書き記したのは、パドマーヴァティー女神であり、彼が独創したとは理解されていないのである。さらに、Jinadās Śāstri は、Pathak や Manoharlāl と同様に、『サムヤクトゥヴァ・ブラカーシャ』を根拠として、パートラケーサリンとヴィドゥヤーナンディンの同一人物説を継承する。また Manoharlāl が引用したフマチャ村の碑文の原文を挙げ、同じようにマガダからカルナータクへ彼が移住したという説を取り (Śāstri, J.[1921:10])、あくまでも同一人物と看做す。Jinadās Śāstri が提供する新しい情報は、次のシュラヴァナ・ベルゴラのチャンドラ

ギリ山頂の碑文 (Malliṣeṇaprasāsti : Śaka Saṃvat 1050 = 1128年) を紹介したことである。

mahimā sa pātrakesariguroḥ paraṃ bhavati yasya bhaktyāsit /

padmāvati sahāyā trilakṣaṇakadarthanaṃ kartuṃ // (以下、Candragiri 碑文)¹⁵⁾

かのパートラケーサリン先生の極めて偉大なることは、『トリラクシャナカダルタナ』を造る際に、先生の信愛によりパドマーヴァティー女神が助力したということである。

この記述では、(1) パートラケーサリンが『トリラクシャナカダルタナ』(Trilakṣaṇakadarthana) という作品を造ったこと、(2) その作品を造る際にパドマーヴァティー女神が助力したということ、の二点が明らかである。Jinadās Śāstrī は『カター・コーシャ』に記述された「パドマーヴァティー女神によって推理の特質を知ったこと」がこの碑文によって裏付けられるとしている (Śāstrī, J.[1921: 6])。

anyathānupapannatva 韻文が仏教僧シャーンタラクシタの『タットヴァサングラハ』(Tattvasaṃgraha) に引用されていることは現在では自明のことであるが、当然その指摘は『タットヴァ・サングラハ』の出版を待たねばならなかった。Vinayatoṣa Bhaṭṭācārya は『タットヴァ・サングラハ』刊本 (G.O.S) の序文において、シャーンタラクシタが引用するパートラスヴァーミン (Pātrasvāmin) という人物が『アシュタサハスリー』の作者パートラケーサリスヴァーミン (ヴィドゥヤーナンディンの別名) でないとするならば、その人物についての情報は殆ど得られないと述べ、かつパートラスヴァーミンがヴィドゥヤーナンディンと同一人物であることに疑問を呈している。つまり、8世紀のシャーンタラクシタが9世紀のヴィドゥヤーナンディンを批判することにそもそも矛盾があり、Bhaṭṭācārya は両者が別の先行するジャイナ教論者を引用している可能性を示している (Bhaṭṭācārya[1926: lxvi-lxvii])。

この『タットヴァ・サングラハ』の出版により、同書の推理章に登場するパートラスヴァーミンというジャイナ教論者が、『カター・コーシャ』に現れるパートラケーサリンであることを明言したのは、またしても Pathak である。彼は Pathak[1930]において、『カター・コーシャ』のパートラケーサリン伝を全文引用し、このパートラケーサリン (= パートラスヴァーミン) がヴィドゥヤーナンディンであることを今一度強調する。すなわち、anyathānupapannatva 韻文がダルマキールティの証因の三条件説を批判するものと考え、『シュローカヴァールティカ』の三条件説批判を『タットヴァ・サングラハ』のそれと比較することにより、両者が同一人物であると理解している (Pathak[1930])。さらに上記の Bhaṭṭācārya による同一人物説に対する疑惑に対しては、ヴィドゥヤーナンディンが『シュローカヴァールティカ』において、「ヴァールティカ作者によって次のように述べられている」(vārtikakāreṇaivam uktam) という記述と共に anyathānupapannatva 韻文を導入していることを指摘し、この疑惑が一蹴できるとしている (Pathak[1930: 79-80])。すなわち、この言明は『シュローカヴァールティカ』の作者である自分自身を指すと考えるのである。

2. 同一人物説批判

上記のように K. B. Pathak を中心として、パートラケーサリンがヴィドゥヤーナンディンと同一人物であるという説が唱導されたが、この同一人物説について決定的な批判を加えたのは、Kailāścandra Śāstri である¹⁶⁾。彼がそれまでの研究者の説を批判することが出来たのは、当時未出版であったにも関わらずアカランカ著『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』、ヴァーディ・ラージャによる注釈『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ』、アナンタヴィールヤ著『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』などを写本によって参照したことにある。Kailāścandra Śāstri は『トリラクシャナカダルタナ』の作者パートラケーサリンが『タットヴァ・サングラハ』に現れるパートラスヴァーミンであり、かつ仏教僧ディグナーガの証因の三条件説を批判しているとする。そして、パートラケーサリンはアカランカ以降のヴィドゥヤーナンディンと同一人物ではなく、アカランカ以前の論師であることを明らかにしている。その根拠は次の通りである(Śāstri, K.[1938: 74-75])。

(1) アカランカは anyathānupapannatva 韻文を『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』の本文として取り込んでいる。(See NVin (a), v.323, p.74.)

(2) 注釈者ヴァーディ・ラージャは、これを注釈して次のように述べている。

「以上のように主題所属性など[の三つの条件]がなくとも、『そうでなければ説明がつかないこと』の力により、証因が知らしめるもの(gamaka)であることをあちこちの場で説明した。そして、『これは自身の知で構想したものではなくて、他のアーガマで確立したことである』ということを示すことを望んで、尊者シーマンダラ・スヴァーミンというティールタンカラ神の聖なる集会(samavasaraṇa: 説法)¹⁷⁾からガナダラの恩寵により得られ、女神パドマーヴァティーによってもたらされてパートラケーサリ・スヴァーミンに付与された Anyathānupapattivārttika を[アカランカ先生は次のように]述べる。」¹⁸⁾

(3) アカランカの『シッディ・ヴィニシュチャヤ』に対する注釈『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』において、著者アナンタヴィールヤは次のように述べている。

「[アカランカ先生の言う]“amalāliḍha”とは「無垢の人々によって」(amala)つまりガナダラをはじめとする人々によって「頂かれた」(āliḍha)、味わわれた(āsvādita) [という意味である。] というのも、彼らは無垢性の欠如により、誤って頂くことはないからである。

それ(無垢の人々が頂いた言葉: amalāliḍhaṃ padam)は誰の[言葉なの]か?

ある人たち(Vṛddha Anantavīrya)¹⁹⁾は、「スヴァーミン」つまりパートラケーサリンの[言葉である]という。

【アナンタヴィールヤ】それはどうしてか?

【答え】彼(パートラケーサリン)は、それ(推理)に関する『トリラクシャナカダル

タナ』というウッタラ・パーシャ (Uttarabhāṣya) を造ったからである。

【アナンタヴィールヤ】もしそうであるならば、残りなく意味を明らかにした、シーマングラ聖者というティールタンカラの〔言葉の〕はずである。というのも、彼（シーマングラ）が最初に anyathānupapannatva 韻文を造ったからである。

【問い】それはどうして分かるのか？

【アナンタヴィールヤ】ならば、どうしてパートラケーサリンが『トリラクシャナカダルトナ』を造ったことが分かるのか？ということと同じことである。「先師たちによってよく知られているから」と答えたとしても、それは〔私と貴方の〕双方にとって同じことである。さらには〔シーマングラが作者であることを示す〕偉大な話がよく知られている。それ (anyathānupapannatva 韻文) を彼（シーマングラ）が造ったことについて根拠がないというならば、そ〔のパートラケーサリンが作者であること〕がよく知られていることについては何の証拠があろうか。

【問い】彼（パートラケーサリン）のためにそれを造ったからである。

【アナンタヴィールヤ】そうであるならば、あらゆる書物やそれが指し示す内容は、まさに同じ理由で弟子たちのものに他ならない。〔したがって〕「彼が造った」と言えなくなってしまう。そしてパートラケーサリンのものでもない。彼もまた他者（弟子）のためにそれを造ったのであり、そ〔の弟子〕もまた〔別の〕他者のために、というように誰のものでもないことになってしまう。」²⁰⁾

上記のアカランカおよびその注釈者たちの文献を鑑みるならば、anyathānupapannatva 韻文はアカランカ以前の論師によって造られたことが推定できる。ヴァーディ・ラージャは anyathānupapannatva 韻文を「パートラケーサリ・スヴァーミン」の著した *Anyathānupapattivārtika* という書物であると明言し、アカランカ自身の著作とは考えていない。つまり、この韻文は「シーマングラ・スヴァーミン→ガナダラ→パドマーヴァティー女神→パートラケーサリン」という形で伝えられ、アカランカはそれを引用していることになる。

また、アナンタヴィールヤはティールタンカラであるシーマングラ・スヴァーミンが作者であると強調し、韻文の根源をパートラケーサリン以前に設定している。このことは、アナンタヴィールヤがジャイナ教の教義を権威づけるためであるが、少なくともアカランカは「スヴァーミン」(svāmin) と呼ばれる人物の「言葉」(pada) について言及しており、韻文の作者は自身ではないことを示唆している。これらの事実から、Kailāścandra Śāstri は anyathānupapannatva 韻文の作者であるパートラケーサリンがアカランカ以前であると断じる。さらに彼は、パートラケーサリンがパドマーヴァティー女神を通じて『トリラクシャナカダルトナ』を得たということは、ブラバーチャンドラの『カター・ブラバンダ』の記述や、Candragiri 碑文と合致することを指摘し、アカランカが自身の著作にそれを取り入れたとするのである (Śāstri K.[1938: 75])。

このような「パートラケーサリン→アカランカ」という前後関係は、当然「パートラケーサリン=ヴィドゥヤーナンディン」という同一人物説と合致しない。ヴィドゥヤーナンディンはアカ

ランカの注釈者であり、彼以降の論師であることには疑いがないからである。Kailāścandra Śāstri は、同一人物説は誤りであるとして Pathak を痛烈に批判している。まず彼は『サムヤクトゥヴァ・プラカーシャ』は現代の作品であって、この作品だけによって同一人物説が広まったと言う。さらに、『シュローカヴァールティカ』では “hetulakṣaṇaṃ vārttikakāreṇa evam uktam” と導入して anyathānupapannatva 韻文が引用されることから、Pathak が「ヴァールティカ作者 (vārttikakāra)」をヴィドゥヤーナンディン自身であると言うが、この見解は誤解であるとする (Śāstri K.[1938: 75-76])。Kailāścandra Śāstri はこの「ヴァールティカ作者」を『タットヴァ・アルタ・ラージャヴァールティカ』の作者アカランカであると考えている。つまり、『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』本文に anyathānupapannatva 韻文が取り込まれており、ヴィドゥヤーナンディンには『トリラクシャナカダルタナ』およびパートラケーサリンについての情報がなかったので、彼はアカランカがその作者であると理解した、と推定しているのである。

Kailāścandra Śāstri はさらに『トリラクシャナカダルタナ』というパートラケーサリンの作品には、anyathānupapannatva 韻文だけではなく、他の記述も存在したことをヴァーディ・ラージャの言明を根拠として示している (Śāstri K.[1938: 76])。

(1) NVinV, II. p.198: traividhyaniyamam pratiṣidhya pātrakesarisvāmināpi tanniyamaṃ pratiṣiddha iti darśayaṃs tadvacanam āha /

(2) NVinV, II. p.234: trilakṣaṇakadarthane vā śāstre vistareṇa śrīpātrakesarisvāminā pratipādanād ity alam abhiniveśena /⁽²¹⁾

上記の記述では、パートラケーサリンが(1)「証因を三種に限定すること」を批判したこと、(2)sādharmyasama などの論難 (jāti) について『トリラクシャナカダルタナ』において説明したことが理解される。特に(2)は、アカランカの “śāstre vā vistaroktitah” (NVin(b) II. v. 207b) という言葉を解説したものであり、アカランカがパートラケーサリンの作品 (śāstra = *Trilakṣaṇakadarthana*) を参照していたことを示唆する点で重要であろう⁽²²⁾。いずれにせよ、Kailāścandra Śāstri はアカランカ作品とその注釈文献を写本によって参照し、従来の同一人物説を完全に覆したのである。

Kailāścandra Śāstri 以降の研究者は、ほぼ彼の見解を受け入れ、同一人物説を主張することはない。まず、Kailāścandra Śāstri が同一人物説批判で根拠として挙げた『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』を『アカランカ・グラント・トラヤ』として1939年に校訂出版した Mahendrakumār Śāstri は、(1)『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』においてアナンタヴィールヤは anyathānupapannatva 韻文をシーマンダラ・スヴァーミンの作とすること、(2)『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ』および『カター・コーシャ』によれば、シーマンダラ・スヴァーミンからパドマーヴァティー女神を通じてパートラケーサリンに韻文が付与されたこと、(3)『シュローカヴァールティカ』では、この韻文は「ヴァールティカ作者」の作とされており、それはアカランカ (ラージャヴァールティカ作者: Rājāvārttikakāra) であること、(4)『タットヴァ・サングラハ』ではこれをパートラスヴァーミンの作とすること、を指摘している (Śāstri,

M.[1939: 164])。

Mahendrakumār Śāstrī はこののち、*Jain Darśan* においてやはり anyathānupapannatva 韻文が『ニャーヤ・ヴィニシュチャヤ』に取り込まれて引用されていることを指摘し、さらにヴィドゥヤーナンディンがこの韻文を「因の五条件説」批判のために改変していること²³⁾を示した(Śāstrī M.[1955: 243-244])。さらに『ニャーヤ・ヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ』(1949, 1954年)『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』(1959年)などを校訂出版し、Kailāścandra Śāstrī が利用したテキストを世に示した。特に後者の序文では、パートラケーサリンはディグナーガ以降シャーンタラクシタ以前の論師であり、アカランカの『ニャーヤ・ヴィニシュチャヤ』に取り込まれていることも明言している(Śāstrī, M.[1959: 36])²⁴⁾。

以上のように、Kailāścandra Śāstrī が示した「パートラケーサリン＝ヴィドゥヤーナンディン」同一人物説に対する批判は、Mahendrakumār Śāstrī の一連の校訂テキスト出版によって裏付けられ、現在では同一人物説は完全な誤りと考えられるようになっている。Mahendrakumār Śāstrī 以降のパートラケーサリンの年代論については、志賀[2003]に纏められている²⁵⁾が、今や「パートラケーサリン→アカランカ→ヴィドゥヤーナンディン」という前後関係が確立されているのである。

3. 新たなパートラケーサリン情報

以上、ヴィドゥヤーナンディンとの関係を中心に従来研究を整理したが、ここでは、上記に加えて若干のパートラケーサリンについての情報を補足し付加したい。

(1) Dramila-Saṅgha

既に Jyoti Prasad Jain や Nemicaṇḍra Śāstrī らが指摘している (Jain, J. P.[1964: 166-168], Śāstrī, N.[1974: Vol.2, 239]) が、パートラケーサリンは “Dramila” (もしくは “Drāviḍa”) というサンガに所属していたと考えられている。このサンガは南インドの空衣派で有力なサンガであったと考えられており²⁶⁾、様々な学僧が所属していた。その根拠は、Belūr の碑文 (Śaka Saṃvat 1059 = 1137年) である。

māḍi **samantabhadrasvāmigalu** sandaravarim balika tadiya-śrīmad-
dramilasamghāgresararappa **pātrakesarisvāmigaliṃ** **vakragrīvābhi** rindanantaram /
yasya di n kirtis trailokyam apyagāt / yeva sa bhātyeko **vajranandi** gaṇāgraṇi //
avarim balika **sumatibhṭṭārakaravarim** balika ... samayadipaka raṃ unmilitadoṣaka
..... rajanicarabalamubdohitabhavya kamalamāṭatūrjijitam **akalaṅka** pramāṇatapana sphu
..... //

この碑文では、パートラケーサリンが Dramila サンガに所属していたこと、そしてその前後の論師たちの名称が記述されていることの2点に注目すべきであろう。また、この碑文では、次のような順序で論師の名前が挙げられている。

- (1) サマンタバドラ・スヴァーミン
- (2) パートラケーサリ・スヴァーミン
- (3) ヴァクラグリーヴァ
- (4) ヴァジュラナンディン
- (5) スマティ・バッターラカ
- (6) アカランカ

このような讃辞文 (praśasti) の記載順序は、伝統的に師弟の前後関係に従っており、ここでは「サマンタバドラ→パートラケーサリン→スマティ→アカランカ」という前後関係が示唆されている。これらの論師たちに直接的な師弟関係があったかどうかについては判断できないが、彼らが Dramila サンガの伝統に属する者であったことは確かであろう。このような順序は、既に Mahendrakumār Śāstrī が Candragiri 碑文を根拠として指摘している。彼はアカランカの年代を論ずる際に Candragiri 碑文に注目し、同碑文に現れる論師たちの順序を示している (Śāstrī, M[1959: 56])。その順序は次の通りである²⁸⁾。

- (1) サマンタバドラ
- (2) シンハナンディン
- (3) ヴァクラグリーヴァ
- (4) ヴァジュラナンディン
- (5) パートラケーサリン
- (6) スマティ・デーヴァ
- (7) クマーラセーナ
- (8) チンターマニ
- (9) シュリー・ヴァルダデーヴァ
- (10) マヘーシュヴァラ
- (11) アカランカ

「ヴァクラグリーヴァ」「ヴァジュラナンディン」の順序は Belūr 碑文とは異なり、パートラケーサリンの師匠筋と考えられているが、いずれにしても「サマンタバドラ→パートラケーサリン→スマティ→アカランカ」の順序は動かない。両碑文に現れる「スマティ」を『タットヴァ・サングラハ』のスヤードヴァーダ章などに登場するジャイナ教論師スマティ²⁹⁾であると考えれば、この前後関係は整合性を持つ。すなわち、サマンタバドラを祖として、パートラケーサリンやスマティが後続し、この両者をシャーンタラクシタが批判する。さらにシャーンタラクシタをアカランカが批判するという前後関係が確定できる³⁰⁾。この前後関係からも、パートラケーサリンがアカランカ以前の論師であり、パートラケーサリン＝ヴィドゥヤーナンディン同一人物説が誤りであることが理解できるのである。

(2) ヴァールティカ作者 (vārttikakāra)

既に述べたように、ヴィドゥヤーナンディンは『シュローカヴァールティカ』において、

anyathānupapannatva 韻文を「ヴァールティカ作者」の言葉として引用している。ここでは、ヴィドゥヤーナンディンがアカランカを引用する際にどのような導入文を使用しているかについて検討してみたい。まず、アカランカの名前を言及しない例は次のような箇所に見れる。

TAŚV on I.12, v.4 (p.184) = NVin v.3

TAŚV on I.13, v.13 (p.189) = SVin I. v.27

TAŚV on I.33, p.271: tad uktam / LT v.70

SŚP, p.23: tad uktam ---- SVin I. v.24

これらのうち、前二者はヴィドゥヤーナンディンの韻文本文にアカランカのテキストが取り込まれている例である。『シュローカヴァールティカ』ではアカランカの作品のみならず、ジャイナ教以外の論者も含め様々な著者の韻文が本文中に取り込まれており、その著者に言及しない例は枚挙に暇がない。ゆえに、anyathānupapannatva 韻文もヴィドゥヤーナンディンが他から取り込んだ韻文と考えることには何ら不思議はない。

アカランカの名称あるいは作品名に言及する例は、かなりの数に上る³¹⁾。その中でも「ヴァールティカ作者」という名称が見れるのは次の例である。

PP, p.68: tathā cokatam tattvārthavārtikakāraiḥ / indriyānindriyānapekṣam atītavabhicāram sākāragrahaṇam pratyakṣam (TARV on I.12, p.53) iti /

ここでは「タットヴァ・アルタ・ヴァールティカ作者」として明確にアカランカを意味する事が看取できる。そして、管見の限りではヴィドゥヤーナンディンが「ヴァールティカ作者」という名の元に何らかのテキストを引用する例は、上記の記述と anyathānupapannatva 韻文を引用する以外には見られない。また、自らの『シュローカヴァールティカ』を引用する際には、その殆どが「『タットヴァ・アルタ・シュローカヴァールティカ』では」(tattvārthasloka-vārttike) という導入文を使用しており³²⁾、自らの作品を単に「ヴァールティカ」と称することもない³³⁾。

また次の記述は、アカランカのテキストを「ヴァールティカ」と称する例として非常に有益である。

TAŚV on I. 12, p.184: yadā pradhānabhāvena dravyārthātmavedanam pratyakṣalakṣaṇam tadā spaṣṭam ity anena matiśrutam indriyānindriyāpekṣam vyudasyate, tasya sākālyenāspaṣṭatvāt / yadā tu guṇabhāvena tadā prādeśikapratyakṣavarjanam tad apākriyate, vyavahārāśrayaṇāt / sākāram iti vacanān nirākāradarśanavyudāsaḥ / amjaseti viśeṣaṇād vibhaṅgajñānam indriyānindriyapratyakṣābhāsam utsāritam / tac caivaṃvidham dravyā digocaram eva nānyad iti viśayaviśeṣavacanād darśitam / tataḥ sūtravārtikāvirodhaḥ siddho bhavati /

詳細は割愛するが、この言明は、「知覚」の特質を巡って、『タットヴァ・アルタ・スートラ』の言明とアカランカの『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』第1章第3詩節の言明に相違があるにも関わらず、両者の意図には相違がないことを主張するものである。ここでは、「故に、スートラとヴァールティカに矛盾がないことが成立した」という形で結論が述べられており、ヴィドゥヤー

ナンディンはアカランカのテキスト（ここでは『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』）を「ヴァールティカ」と称している。この事実もヴィドゥヤーナンディンが自らの作品を「ヴァールティカ」と呼ぶことのない傍証となるであろう。また、『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ』を「ヴァールティカ」とするならば、anyathānupapannatva 韻文を「ヴァールティカ作者によって次のように述べられている」として導入することも整合性のあることとなるのである。

（３）カター文献におけるパートラケーサリン伝

パートラケーサリンの生涯について具体的な記述を残した最初の文献は『カター・プラバンダ』である。著者のプラバーチャンドラは、編者の Upadhye によってジャヤシンハ王の時代、11世紀に活躍した人物であるとされている³⁴⁾。この文献が示す重要な点は、パートラケーサリンがパドマーヴァティー女神から anyathānupapannatva 韻文を得たという伝説であろう。この伝説を記す文献・碑文を時代順に並べるならば次の通りである。

0. アナンタヴィールヤ (950-990 ca.)³⁵⁾

『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』

1. ヴァーディ・ラージャ (1025 ca.)³⁶⁾

『ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ』

2. プラバーチャンドラ (11世紀)

『アーラーダナー・カター・プラバンダ』

3. Candragiri 碑文 (1128 ca.)

4. ブラフマネーミダッタ (1575 ca.)³⁷⁾

『アーラーダナー・カター・コーシャ』

アナンタヴィールヤは、パートラケーサリンが『トリラクシャナカダルタナ』の作者であるという伝統を知った上で、それをシーマンダラというティールタンカラの作品であることを強固に主張する。つまり、作者をパートラケーサリン以前に設定することにより、ジャイナ教の伝統の権威を高めようと欲したことが想像される³⁸⁾。続いてヴァーディ・ラージャは伝統説とアナンタヴィールヤ説を折衷し³⁹⁾、「シーマンダラ→ガナダラ→パドマーヴァティー→パートラケーサリン」という形で anyathānupapannatva 韻文が伝えられたと考える。ここに初めてパートラケーサリンとパドマーヴァティーの関係が記述される。プラバーチャンドラはこれを受け、パートラケーサリンの生涯の中に、パドマーヴァティー女神によって韻文がもたらされたことを盛り込み、彼の伝記を完成させる。この伝記の具体的な記述により、シーマンダラが作者という教条主義的な誇張よりも、「正しい信仰」(samyagdarśana) を得るパートラケーサリンというモチーフが好まれ、碑文にもパドマーヴァティー女神のみの記述が継承される。ブラフマネーミダッタは、プラバーチャンドラの散文記述を韻文に改変し⁴⁰⁾、パドマーヴァティーのみに言及する。このようにして、ブラフマネーミダッタの時代には「パドマーヴァティー→パートラケーサリン」という伝承が教化材料として確定していたと考えられる。

『カター・プラバンダ』のパートラケーサリン伝では、もちろんアカランカの名前は登場する

ことなく、『デーヴァーガマ讃歌』として知られるサマンタパドラの『アープタ・ミーマーンサー』のみが言及される。また、本文中には『アープタ・ミーマーンサー』と思われる言葉が挿入されている。

tattvajñānaṃ ca pramāṇaṃ / (See Appendix [4].)

そして、「プラマーナとは真実に関する知である。」

この一節は第101詩節の引用と考えられる。

ĀM, v.101: tattvajñānaṃ pramāṇaṃ te yugapatsarvabhāsanam /

kramabhāvi ca yajñānaṃ syādvādanayasamskṛtam //

『アープタ・ミーマーンサー』では、このようにプラマーナを「真実に関する知」であると言うが、推理 (anumāna) についての明確な定義文は存在しない⁴¹⁾。『アープタ・ミーマーンサー』に親しんだパートラケーサリンは、推理について言及しないサマンタパドラを補完するために、anyathānupapannatva 韻文を創作したのであろう。この事情から、プラバーチャンドラはバドマーヴァティーから韻文を得たという伝説を構成したものと思われる。

『カター・プラバンダ』において言及される作品名として、もう一つ注目すべきは『ジネーンドラ・グナ・サンストゥティ』という作品である。『カター・プラバンダ』『カター・コーシャ』共に、正しい信仰を得たパートラケーサリンがこの作品を造ったことを記述している。これは、『パートラケーサリ・ストートラ』として知られる作品に他ならない。『パートラケーサリ・ストートラ』の冒頭は次のような韻文で開始される。

PāS v.1:

jīnendra guṇasaṃstutis tava manāg api prastutā

bhavaty akhilakarmanāṃ prahataye paraṃ kārṇam /

iti vyavasitā matir mama tato 'ham atyādarāt

sphuṭārthanayapeśalāṃ sugata saṃvidhāsyē stutim //

ジネーンドラよ！御身の徳の称讃を少しばかりながら開始いたします。[御身の徳の称讃は] あらゆる業を撲滅するための優れた原因となるものです。このように私は決意いたしました。善きお方よ！ゆえに私は [御身への] 厚き信愛から、明確な意味を持つナヤで飾られた讃歌を造りましょう。

この冒頭部の言葉により『ジネーンドラ・グナ・サンストゥティ』と呼ばれることは明確であるが、この50詩節からなる作品の名称や著者については、甚だ不明なことが多い。この作品には著者不明、成立年代不明の『ティーカー』と呼ばれる注釈が存在するが、この注釈を含む唯一の刊本の末尾は以下の通りである。

PāS, p.130: iti śrīnikhilatārkikacūḍāmaṇi vidyānaṃdisvāmipraṇiṭam

bṛhatpaṃcanamaskārastotrāparanāmadheyam pātrakesaristotram samāptam /

刊本がどのような写本を元に出版されたかは不明であるが、編者の Manoharlāl は故マーニカチャンド氏の図書館に所蔵されていた古い校本を元に出版したことを記述している (Manoharlāl

[1918b: 3])。このコロフォンに従うならば、著者はヴィドゥヤーナンディンである。しかも書名は『プリハット・パンチャ・ナマスカーラ・ストートラ』という別名を持つ『パートラケーサリ・ストートラ』と記されている。しかしながら、Pathak や Kailāscandra Śāstrī、Mahendrakumār Śāstrī ともこの作品には言及せず、ヴィドゥヤーナンディンの著作にも含めていない。マラティー語注と共にこの作品を出版した Jinadās Śāstrī は、序文においてブラフマネーミダッタの『カター・コーシャ』における記述を元に、著者がパートラケーサリンであることが分かり、かつパートラケーサリンがヴィドゥヤーナンディンと同一人物であると紹介するのみである。現在のところ、この作品についての研究は見当たらず⁴²⁾、著者についても確定的な見解はない⁴³⁾。ここでは、この作品名が『カター・ブラバンダ』に現れていることに基いて、同一人物説が生じた可能性のみを指摘しておきたい。

すなわち、作品中には ‘pātrakesarin’ という語は現れず、最終詩節にも書名を示唆する言葉は記述されていない。ただし、ブラバーチャンドラがこの書物を知っており、その著者をパートラケーサリンであると理解していたことは確実である。この作品がどの時点でヴィドゥヤーナンディンの著作とされたかについても不明であるが、『ティーカー』作者もしくは『ティーカー』の最初の出版（マーニカチャンド氏の私蔵本）によってヴィドゥヤーナンディン作と理解されていたことも確実であろう。つまり、Pathak (1892年) 以前に両者の同一人物説が成立していた可能性があるのである。この作品の著者問題については、同作品の内容をヴィドゥヤーナンディンの他著作と比較するなどの研究が必要であろうが、今後の課題としておきたい。

4. 結語

以上、パートラケーサリンについての従来研究を整理したが、次のことが言えるであろう。

- (1) パートラケーサリンは、サマンタパドラ以降の空衣派のジャイナ教論理学者の系譜に属し、アカランカに先行する。
- (2) ヴィドゥヤーナンディンは anyathānupapannatva 韻文の作者について、それをアカランカと考えて引用している可能性があり、彼自身が作者とは考えられない。
- (3) アナンタヴィールヤ以下の論理学者たちは、anyathānupapannatva 韻文がパートラケーサリンの『トリラクシャナカダルタナ』という作品に含まれるものであるという伝統を知っており、さらにそれをシーマンダラ・スヴァーミンやパドマーヴァティー女神が根源であるとして、権威づけを行った。
- (4) ブラバーチャンドラは、「正しい信仰」についての教化のため、「パドマーヴァティー女神 → パートラケーサリン」という伝説を完成させ、ブラフマネーミダッタはこれを継承した。

【Appendix】

『アーラーダナー・カタール・プラバンダ』

第1話 Samyaktvodyotanakathā 翻訳 (ĀKP, pp.2-3)

- ・刊本はĀKPのみであり、この刊本も単一の写本を元に校訂されたものである。
- ・写本の情報、文献の内容、著者などについては、Upadhye[1974]を参照されたい。

[0] tatra samyaktvodyotanakathā / yathā ---- magadhadeśe ahicchātranagare rājā avanipālo mahāmaṇḍaleśvaraḥ pañcaśatadvijapaṇḍitaiḥ parivṛtaḥ sātīśayaṃ rājyaṃ kurvāṇas tiṣṭhati / dvijās ca sarve 'pi saṃdhyādvaye saṃdhyāvandanāṃ kṛtvā śrīpārśvanāthaṃ ca dṛṣṭvā nijanijakarmasu pravartante /

[0] こ [れら様々な ārādhana] のうち⁴⁴⁾、正しい信仰 (samyaktva=samyagdarśana)⁴⁵⁾を明らかにする話は次のようなものである。

マガダ地方のアヒッチャトラ (ahicchatra) という町にアヴァニパーラという偉大な地球の主である王様が居り、500人の再生族の賢者たちに取り巻かれ、卓越した力でもって王国を支配していた。そして再生族のものは全て、午前には午前の礼拝、午後には午後の礼拝をなし、吉祥なるパールシュヴァナータを見てから、それぞれの宗教的行為に従事していた。

[1] ekadā cāritrabhūṣaṇamuneḥ śrīpārśvanāthasyāgre devāgamenāparāhṇe devavandanāṃ kurvataḥ pātrakesariṇā saha mahāpaṇḍitāḥ samastapradhānāḥ saṃdhyāvandanāṃ kṛtvā śrīpārśvanāthaṃ draṣṭum āgatāḥ /

[1] ある時、聖者チャーリトラブーシャナは吉祥なるパールシュヴァナータ [像] の前で『デーヴァアーガマ [讃歌]』によって午後の神に対する礼拝を行っていた。その時、全世界の指導者たる偉大なる賢者たちは、パートラケーサリンを伴って午後の礼拝をして、吉祥なるパールシュヴァナータ [像] を見るために [そこへ] やって来た。

[2] devāgamastavaṃ śrutvā [pātrakesari] munim prṣṭavān ---- bhagavan, arthaṃ budhyase / bhagavatoktam ---- nāhaṃ budhye / tatas tenoktam ---- punaḥ paṭha / tato bhagavatā viśiṣṭapadaviśrāmair devāgamastavo bhaṇitāḥ /

[2] 『デーヴァアーガマ讃歌』を聞いてパートラケーサリンは、聖者 [チャーリトラブーシャナ] に
「尊者よ。御身はその意味をご存じなのですね。」

と尋ねた。尊者は

「いいえ、私は意味は知りませんよ。」

と答えた。そこで彼 (パートラケーサリン) は

「ではもう一度詠んでいただけますか。」

と言った。すると、尊者は特別に単語を区切って『デーヴァーガマ讃歌』を読み上げた。

[3] pātrekesariṇaś ca ekasamsthatvenaikahelayaiva śabdato 'śeṣadevāgamāvagāhakatvasambhavāt
śanaiḥ śanais tadarthaṃ cetasi paribhāvayato darśanamohakṣayopāśamavaśād
utpannatattvārthaśraddhānasya etat pratipāditam eva jīvājīvastusvarūpaṃ paramārthato nānyad iti
grhe gatvā rātrau vastusvarūpaṃ parāmṛśato 'numānaviṣaye saṃśayaḥ saṃjātaḥ /

[3] そしてパートラケーサリンは、心を集中していたので、たった一回だけの試みで、言葉の上から残りなく『デーヴァーガマ讃歌』を習得することが可能であった。したがって、徐々にその意味を心の中で深く考えていると、信仰（見）に関わる痴〔業〕の滅尽と抑止の力により、真実に対する信仰が生じた。「真実にはジーヴァとアジーヴァという事物の本質はこれこれであると説かれており、それ以外ではない」と。〔そして彼は〕家に帰って、夜に事物の本質について熟慮していると、推理についての疑問がわき上がった。

[4] atra hi jivādivastu prameyaṃ pratipāditam / tattvajñānaṃ ca pramāṇam / anumānalakṣaṇam⁴⁶⁾
tat kidṛśaṃ jainamate sambhavatityevaṃ muhur muhuḥ saṃśayaṃ kurvāṇaḥ padmāvatidevyā
āsanakampād āgatya bhaṇitaḥ ---- bho pātrakesarin, prātaḥ śrīpārśvanāthadarśanād
anumānalakṣaṇanīścayo bhaviṣyatity uktvā śrīpārśvanāthaphaṇāmaṇḍape anumānalakṣaṇaśloko
likhitaḥ ----

[4] 「実に、この〔ジャイナの教え〕では⁴⁷⁾、ジーヴァなどの事物が認識対象であると説明されている。そして〔『デーヴァーガマ讃歌』では〕「ブラマーナとは真実に関する知である」〔と説かれている〕。ならば、ジャイナの見解では、推理の特質とはどのようなものなのか。」

〔パートラケーサリンが〕以上のように何度も何度も疑惑を抱いていると、パドマーヴァティー女神は、座を蹴って（急いで）やって来て次のように〔彼に〕話しかけた。

「おお、パートラケーサリンよ。明日の朝、吉祥なるパールシュヴァナータ〔像〕を見たらば、推理の特質についての決定知が生じるでしょう。」

〔女神は〕以上のように述べて、吉祥なるパールシュヴァナータ〔像〕の蛇の後蓋に〔次のような〕推理の特質〔を述べる〕シュローカを書き記した。

[5] anyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim /
nānyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim // iti /

[5] 「そうでなければ説明がつかないこと」がある場合、三つ〔の条件〕が何の役に立とうか。「そうでなければ説明がつかないこと」がない場合、三つ〔の条件〕が何の役に立とうか。

[6] devatādarśane saṃjāte jainamate atīśayena rucis tasya saṃjātā / prātaś ca devaṃ paśyataḥ phaṇāmaṇḍape 'numānalakṣaṇaslokaadarśanāt tallakṣaṇaṇīścaye sati saṃjātaharṣaḥ pulakitaśāriro 'yam eva devo 'yam eva dharma iti darśanamohakṣayopasamaviśeṣavaśād utpannaviśiṣṭasamyagdarśano jinoktaṃ tattvaṃ cetasi punaḥ punaś ciraṃ paribhāvayan dvijair bhaṇitaḥ ---- mīmāṃsārtha eva tātparyataś cetasi cintyatām, kiṃ jainamatārthacintayeti /

[6] [実に] 神への信仰が生じたならば、その者にはジャイナの見解に対する優れた光明が生じるものである。そして [パートラケーサリンは] 翌朝、神 [像] を見て、その蛇の後蓋に推理の特質を述べるシュローカを見た。そのことにより、彼にそれ (推理) の特質についての決定知が生まれると、喜びが生じ、全身が総毛立った。すると、優れた見 (信仰) に関わる痴 [業] の滅尽と抑止により、「これこそが神であり、これこそがダルマである」というように、優れた正しい信仰 (samyagdarśana) が生じた。そして、ジナの述べた真実を心の中で何度も長い間反復して熟考していた。すると再生族の者たちは [彼に次のように] 言った。

「ミーマーンサーの意味こそを注意深く心の中で考えるべきである。ジャイナの見解の意味を考えて何になるうか。」と。

[7] tataḥ pātrakesariṇoktaṃ ---- jainamatam eva sarvamatebhyaḥ śreṣṭham, ato bhavadbhir api mithyābhiniveśaṃ parityajya tatraiva ratiḥ kartavyeti vivāde sati samastān api tān rājño 'gre vādena jītvā jainamatam samarthyatmanaḥ samyaktvaguṇaḥ prakāśitaḥ / anyamatanirākaraṇapravaṇo jinendraguṇasamstutistavaś ca kṛtaḥ / taṃ ca tathābhūtaṃ mahāpaṇḍitaṃ dṛṣṭvā avanipālādayo grhitasamyaktvā jinadharma eva ratāḥ saṃjātā iti //

[7] それに対してパートラケーサリンは次のように答えた。

「ジャイナの見解こそが全ての見解よりも優れている。ゆえに貴方がたも誤った見解に囚われるのをやめて、こ [のジャイナの見解] にこそ専心すべきです。」

と。[以上のような] 異論が起こった時、[パートラケーサリンは] 王の面前で彼らすべてを論争で打ち負かし、ジャイナの見解の正当性を確立し、正しい信仰の徳を外に示した。そして、他の見解の論駁に専念する『ジネーンドラ・グナ・サンストウティ』という讃歌を造った。すると、このような偉大な学者たる彼 (パートラケーサリン) を見て、アヴァニパーラ王をはじめとする人々は、彼の正しい信仰を理解して、ジナのダルマだけに専心するようになったのである。

【略号および参考文献】

- ĀKK: *Ārāḍhanākathākośa* (Brahmanemidatta): (a): See Manoharlāl [1918a]. (b): See Pathak [1930].
 ĀKP: *Ārāḍhanākathāprabandha* (Prabhācandra): A. N. Upadhye (ed.), *Prabhācandra's Ārāḍhanā-Kathā-Prabandha or Kathākośa*. MDJG, No.55, Delhi: Bhāratiya Jñānapīṭha, 1974.
 ĀM: *Āptamīmāṃsā* (Samantabhadra): Gajādhar Lāl Jain (ed.), *Āptamīmāṃsā Pramāṇaparīkṣā ca*. Sanātana Jaina Granthamālā 10-7, 8, Benares: Bhāratiya Jain Siddhānt Prakāśiṇī Saṃsthā, 1914.
 ĀP: *Āptaparīkṣā* (Vidyānandin): Darbārīlāl Jain (ed.), *Tārīkikaśiromaṇi Śrīmadvidyānandasvāmivīracitā*

- Ātapaṛikṣā Svopajñātpaṛikṣālāṅkṛti-ṭīkāyutā.* Virasevāmandir-Granthamālā 8, Sarasāvā: Virasevāmandir, 1949.
- ĀPu: *Ādipurāṇa* (Jinasena): Pannalal Jain (ed.), *Ādipurāṇa of Ācārya Jinasena*. 2Vols., Mūrtidevī Jaina Granthamālā: Sanskr̥tāṅka 8, New Delhi: Bhāratiya Jñānapīṭha, Vik. Saṃ. 2007 (9th edition, 2003).
- AS: *Aṣṭasahasrī* (Vidyānandin): Vaṃśīdhar (ed.), *Aṣṭasahasrī*. Sholapur: Ramchandra Natharangī, Gandhi, 1915.
- BhĀ: *Bhagavatī Ārāḍhanā* (Śivārya): Kailāścandra Śāstrī (ed.), *Ācārya Śrī Śivārya's Bhagavatī-Ārāḍhanā with the Sanskrit Ṭīkā Vijayodaya of Aparājita Sūri*. Vol.I, Jivārāja Jaina Granthamālā, No.37, Sholapur: Jain Samskriti Samrakshaka Sangha, 1978.
- Bhaṭṭācārya, Vinayatoṣa
[1926] "Foreword." *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Vol.I, Gaekwad's Oriental Series No. XXX, Baroda: Oriental Institute (Reprint, 1984).
- Glasesnapp, Helmuth von
[1925] *Der Jainismus: Ein indische Erlösungsreligion*. Berlin: Alf Häger Verlag (Reprint, Hildesheim, Zülich, New York: Georg Olms Verlag, 1984).
- Handiqui, Krishna Kanta
[1968] *Yaśastilaka and Indian Culture or Somadeva's Yaśastilaka and Aspects of Jainism and Indian Thought and Culture in the Tenth Century*. Jivārāja Jaina Granthamālā No.2, Sholapur, Jain Samskriti Samrakṣaka Saṅgha.
- Jain, Darbārīlāl
[1949] "Prastāvanā." *Ātapaṛikṣā*. See ĀP.
- Jain, Jagadīścandra
[1994] *Jain Kathā Sāhitya: Vividha rūpoṃ meṃ*. Prakṛta Bhārati Puṣpa 101, Jaypur: Prakṛta Bhārati Akādāmī.
- Jain, Jyoti Prasad
[1964] *The Jaina Sources of the History of Ancient India (100 B. C. - A. D. 900)*. Delhi: Munshi Ram Manohar Lal.
- Joseph, P. M.
[1997] *Jainism in South India*. Thiruvananthapuram: The International School of Dravidian Linguistics.
- JŚLS1: *Jainaśilālekhasaṃgraha* Part I: Hiralal Jain (compiled), *Jainaśilālekhasaṃgrahaḥ, prathamā bhāgaḥ*. MDJG, No.28., Bombay: MDJG Samiti, 1928 (2nd edition, New Delhi: Bhāratiya Jñānapīṭha, 2006.)
- JŚLS3: *Jainaśilālekhasaṃgraha* Part III: Paṇḍita Vijayamūrti (compiled), *Jainaśilālekhasaṃgrahaḥ, tṛtīyā bhāgaḥ*. MDJG, No.46, Mumbai: MDJG samiti, 1957.
- LT: *Laghiyastraya* (Akalaṅka): Mahendrakumār Śāstrī (ed.), *Akalaṅkagranthatrayam*, Singhi Jain Series No.12, Ahmedabad-Calcutta: Singhi Jain Granthamālā, 1939.
- Manoharlāl, Pt.
[1918a] "Prastāvanā." *Tattvārthaślokaṇṭikā*. See TAŚV.
[1918b] "Saṃgrahake Granthoṃ aur Granthakartāoṃkā Saṃkṣipt Paricay." *Tattvānuśāsanādisaṃgrahaḥ*. See PāS (a).
- MDJG: Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā.

- NVin: *Nyāyaviniścaya* (Akalaṅka): (a): *Akalaṅkagranthatrayam*. See LT. (b): Mahendrakumār Śāstri (ed.), *Nyāyaviniścayavivaraṇam*. 2Vols. Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Saṃskṛta Granthāṅka, 3 & 12, Kashi: Bhāratiya Jñānapīṭha, 1949, 1954.
- NVinV: *Nyāyaviniścayavivaraṇa* (Vādirāja Sūri): See NVin (b).
- PāS: *Pātrakesaristotra*: (a): Pt. Manoharlāl (ed.), *Tattvānuśāsanādisaṃgrahaḥ*. MDJG, No.13, Bombay: MDJG Samiti, Vikrama Saṃvat 1975 (=1918). (b): Jinadās Śāstri (ed.), *Śrīpātrakesarī Stotra tathā Śrīpurapārśvanātha Stotra*. With Marāṭhi Ṭikā by the editor, Nimgaon-Ketki: Hirachand Gautamchand Gandhi, 1921.
- PP: *Pramāṇaparīkṣā* (Vidyānandin): See ĀM.
- Pathak, K. B.
- [1892] “Bhartṛhari and Kumārila.” *The Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*. Volume XVIII., pp.213-238.
- [1930] “Dharmakīrti’s Trilakṣaṇahetu Attacked by Pātrakesarī and Defended by Śāntarakṣita.” *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.*, Volume XII, Part I, pp.71-80.
- Śāstri, Jinadās
- [1921] “Ācārya Pātrakesarī athavā Vidyānadi Svāmī.” *Śrīpātrakesarī Stotra tathā Śrīpurapārśvanātha Stotra*. See PāS (b).
- Śāstri, Kailāścandra
- [1938] “Prastāvanā.” Mahendrakumār Śāstri (ed.), *Nyāyakumudacandraḥ, Prathamā bhāgaḥ* (Vol.I). MDJG, No.38, Bombay: MDJG Samiti, 1938 (Reprint, Delhi: Sri Satguru Publication, 1991.).
- [1966] *Jain Nyāya*. Jñānapīṭha Mūrtidevī Jain Granthamālā: Hindī Granthāṅka 10, Delhi: Bhāratiya Jñānapīṭha Prakāśan.
- [1978] “Prastāvanā.” *Bhagavati Ārādhana*. Vol.I. See BhĀ.
- Śāstri, Mahendrakumār
- [1939] “Ṭippaṇāni.” *Akalaṅkagranthatrayam*. See LT.
- [1941a] “Prastāvanā.” Mahendrakumār Śāstri (ed.), *Nyāyakumudacandraḥ, Dvitiya bhāgaḥ* (Vol.II). MDJG, No.39, Bombay: MDJG Samiti, 1941 (Reprint, Delhi: Sri Satguru Publication, 1991.).
- [1955] *Jain Darśan*. Varanasi: Śrī Gaṇeś Varṇī Digambara Jain Saṃsthān. (3rd. edition, 1974.)
- [1959] “Introduction.” *Siddhiviniścayaṭīkā*. See SVin.
- Śāstri, Nemicandra
- [1974] *Tīrthaṅkar Mahāvīr aur unkī Ācārya-paramparā*. 3Vols. Varanasi: Śrī Bhāratavarṣiya Digambara Jain Vidvatparīṣad. (2nd edition, Muzafarnagar: Ācārya Śāntisāgar Chāṇī Granthamālā, 1992.)
- Shah, U. P.
- [1997] “The Historical Origin and Ontological Interpretation of Arhat Pārśva’s Association with Dharapendra.” M. A. Dhaky (ed.), *Arhat Pārśva and Dharapendra Nexus*. Delhi: Bhogilal Leharchand Institute of Indology, pp.29-43.
- Shiga, Kiyokuni (志賀浄邦)
- [2003] 「推理論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の論争—証因の三条件と一条件の対立を中心に—」、『南都仏教』、第83号、pp.60-97.
- [2005] 「ジャイナ論理学における内遍充論の生成と発展」、『ジャイナ教研究』、第11号、pp.53-94.
- SŚP: *Satyāśāsanaparīkṣā* (Vidyānandin): Gokulacandra Jain (ed.), *Ācārya Vidyānandikṛta*

Satyāsāsanaparīkṣā. Bhāratiya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Saṃskṛta Granthāṃka 30, Nayī Dillī (New Delhi): Bhāratiya Jñānapīṭha Prakāśan, 1964.

SVin: *Siddhivinīścaya* (Akalaṅka): Mahendrakumār Śāstrī (ed.), *Siddhivinīścayaṭīkā*. 2Vols, Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Saṃskṛta Granthāṅka, 22 & 23, Kashi: Bhāratiya Jñānapīṭha, 1959.

SVinṬ: *Siddhivinīścayaṭīkā* (Anantavīrya): See SVin.

TARV: *Tattvārtharājavārttika* (Akalaṅka): Mahendrakumār Jain (ed.), *Tattvārthavārttika*. 2Vols. Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Sanskrit Grantha No.10, 20, Varanasi: Bhāratiya Jñānapīṭha, 1953, 1957.

TASV: *Tattvārthaslokavārttika* (Vidyānandin): Pt. Manoharlāl (ed.), *Śrīmadvidyānamdisvāmīviracitaṃ Tattvārthaslokavārtikam*. Gandhinātārāṅga Jainagranthamālā, Mumbai: Ramchandra Natharangi, Gandhi, 1918.

Uno, Tomoyuki (宇野智行)

[2008] 「ジャイナ教論理学の萌芽—論理の担う役割について—」、『筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所年報』、第19号、pp.1-14.

Upadhye, A. N.

[1974] “Introduction.” *Prabhācandra’s Ārādhanā-Kathā-Prabandha or Kathākośa*. See AKP.

Vaṃśīdhar

[1915] “Granthakartṛviśaye Paricayaḥ.” *Aṣṭasaḥsṛī*. See AS.

Wiley, Kristi L.

[2004] *Historical Dictionary of Jainism*. Historical Dictionaries of Religions, Philosophies, and Movements, No.53, Lanham, Toronto, Oxford: The Scarecrow Press, Inc.

Williams, R.

[1963] *Jaina Yoga: A Survey of the Mediaeval Śrāvakācāras*. Oxford: Oxford University Press (Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 1991.).

【註】

* 本稿は、筑紫女学園大学・短期大学部平成20年度特別研究助成費（一般研究）による研究成果の一部である。なお共同研究者である川尻洋平博士からは数々の助言を頂いた。また、藤永伸博士（都城工業高等専門学校教授）からは、貴重な資料をご提供頂くとともに、多くの示唆を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

- 1) ジャイナ教論理期以前の聖典注釈文献における論理学の目的については、宇野[2008]を参照されたい。
- 2) 証因の特質、特に『タットヴァ・サングラハ』に現われるパートラスヴァーミン説については、志賀[2003]を、「そうでなければ説明がつかないこと」という特質と内遍充論については志賀[2005]を参照されたい。なお両論文には、ジャイナ教の証因の一条件説についての従来研究が纏められている。
- 3) 『アーラーダナー・カタール・ブラバンダ』は別名『カタール・コーシャ』とも呼ばれる。ただし本稿ではブラフマネーミダッタの『アーラーダナー・カタール・コーシャ』と区別するため、『カタール・ブラバンダ』とする。
- 4) ジナセーナはその著作『ジャヤダヴァラー』をシャカ暦759年 (ca. 837) に完成させており、その直後に『アーディ・プラーナ』を著したと考えられている。この年代は、Śāstrī, N.[1974: Vol.2, 338-339]による。
- 5) See ĀPu I. v.53: bhaṭṭakalāṅkaśrīpālāpātrakesariṇaṃ guṇāḥ / viduṣāṃ hrdayārūḍhā hārāyante

’tinirmalāḥ //.

- 6) ただし Pathak は根拠となる写本の情報は示していない。その写本が、シュラヴァナ・ベルゴラの Brahmasūri Śāstri という人物の所蔵であること、カンナダ文字で書写されていること、のみ情報提供しており、この写本に記載されたテキスト原文については無提示である。See Pathak [1892: 222].
- 7) Pathak は脚注22において、Deccan College Ms. No.777 of 1875-76という写本情報を示すが、筆者未見。
- 8) See TAŚV on TAS 1.2, p.83: nanu samyagdarśanaśabdanirvacanasāmarthyād eva samyagdarśanasvarūpanirṇayād aśeṣatadvipratipattinivṛtteḥ siddhatvāt tadarthaṃ tallakṣaṇavacanāṃ na yuktimaḍ eveti kasyacid āreḱā, tām apākaroti ---- /
- 9) 『ジュニャーナスールヨーダヤ』という戯曲作品の詳細については、Pathak は何ら情報を提供しない。現在のところ筆者にもこの作品の詳細については不明である。ただし、Winternitz はジャイナ教の戯曲文学作品としてこの作品名のみ記載している（ヴィンテルニッツ（中野義照訳）『ジャイナ教文献』、高野山、日本印度学会、p.289.）。
- 10) See Manoharlāl [1918a: 4]. Manoharlāl は [1918b] においても二人の同一人物説を踏襲しているが、ここでは “Syādvādaḍyāpati Vidyānanda” という論文 (*Jainahitaiṣi*, varṣa 9, aṃka 9所収) により明らかであると言う。著者は、Nāthūrām Premi であると思われる。この論文については入手できず、出版年などについても詳細は不明である。
- 11) Ahicchatra については、Handiqui [1968: 511] を参照されたい。Handiqui によれば、10世紀のソーマデーヴァ（空衣派）はその著作『ヤシャス・ティラカ』において、“śrīmatpārśvanāthaprameśvara-yaśaḥprakāśanām atre ahicchatre” と述べている。
- 12) この碑文の原文については、Manoharlāl [1918a: 5]、Śāstri, J [1921: 7-8] などに記載されている。両文献によれば以下の通り。 najarājapaṭṭaṇamahīpatinaṃjapaṛiṣaḍi śrīmadvidyānaṃḍisvāmīnaṃḍanamallibhaṭṭābhīdho vidagdho vihitānavadyavivādena vijigye
- 13) パドマーヴァティー女神は、パールシュヴァナータのヤクシー (yakṣi) である。空白両派の様々な文献では、苦行中のパールシュヴァをカマタ (Kamaṭha) という悪魔が妨害するが、その際にガラナ (Dharaṇa) という蛇神が傘となって、カマタの降らせる雨、岩、砲撃からその身を守ることが記されている。このガラナの妻がパドマーヴァティーである。また、次のような伝説も存在する。カマタが五火苦行 (pañcāgni-tapa) を行っている際に、その薪の丸太に二匹の蛇がおり、パールシュヴァがこれを助けたが、すぐさま二匹の蛇は死んでしまった。パールシュヴァは、二匹のために Namaskāra-Maṅgala を唱えると二匹はただちにガラネードラとパドマーヴァティーとして生まれ変わり、パールシュヴァの眷属となった。パドマーヴァティーについては、Shah [1997], Wiley [2004: 163] を参照せよ。
- 14) 前注で述べたように、パールシュヴァナータの象徴（眷属）は蛇 (sarpa) であり、そのジナ像の頭は後方から複数のコブラによって覆われている。その図像については、Glesenapp [1925: Appendix 27] や Shah [1997] が収録された *Arhat Pārśva and Dharaṇendra Nexus* の付録を参照されたい。
- 15) JŚLS1, 54(67) Pārśvanātha Basti meṃ eka Stambhakāra (Śaka Saṃvat 1050), p.193.
- 16) ただし同一人物説を初めて批判したのは、Kailāścandra Śāstri ではなく Jugalkiśor Mukhtār と考えられる。Darbārīlāl Jain による『アーブタ・バリークシャー』刊本の序文によれば次のことが理解できる (Jain, D. [1949: 8] を参照)。(1) Nāthūrām Premi の “Syādvādaḍyāpati Vidyānanda” という論文 (*Jainahitaiṣi*, varṣa 9, aṃka 9所収) などでは同一人物説がとられている。(2) その誤りは今 (1949年) から16-7年前まで広まっていた。(3) この誤りを正したのは、Jugalkiśor Mukhtār の “Svāmī Pātrakesarī aur Vidyānanda” という論文である (*Anekānta*, varṣa 1, kirāṇa 2所収)。このこ

とから、Mukhtār が上記論文を著したのは、1932-3年ごろと考えられるので、Kailāścandra Śāstri の論稿に先行して同一人物を改めたと思われる。残念ながら、上記の Premi 論文および Mukhtār 論文は入手できず、参照できなかった。

- 17) ジャイナ教の伝統では、シーマングラとは、現在もマハーヴィデーハにおいて説法を続けるティールタンカラと考えられている。クダクダがこのティールタンカラの聖なる集会に参加して教えを受けたという伝承がある。シーマングラについては、Wiley[2004: 199]を参照されたい。
- 18) NVinV, II. p.177: tad evaṃ pakṣadharmatvādikam antareṇāpi anyathānupapattibalena hetor gamakatvaṃ tatra tatra sthāne pratipādyā nedam svabuddhiparikalpitaṃ api tu parāgamasiddham ity upadarśayitukāmo bhagavatsimandharasvāmīrtirthakaradevasamavasaraṇād gaṇadharadevaprasādād āsāditam devyā padmāvatyā yad āniya pātrakesariśvāmine samarpitaṃ anyathānupapattivārttikaṃ tad āha / テキストは刊本に従っている。Kailāścandra Śāstri は写本を参照しているため、現行刊本と相違があることに注意されたい。
- 19) Mahendrakumār Śāstri は『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』に現れる「他の人たち」(anye / apare) を老アナンタヴィールヤ (Vṛddha Anantavīrya) として、著者アナンタヴィールヤに先行する論師であったことを指摘している。そして当該箇所においても、対論者は先行する老アナンタヴィールヤであるとする。See Śāstri, M.[1959: 70]。
- 20) SVinT, pp.371-372: amalāliḍḍham amalaiḥ gaṇadharaprabhṛtibhiḥ āliḍḍham āśvāditam / na hi sadoṣam ālihanti amalatvāhāniḥ(neḥ) / kasya tat ity atrāha ---- svāminaḥ pātrakesariṇa ity eke / kuta etat, tena tadviśayatrīlakṣaṇakadarthanam uttarabhāṣyaṃ yataḥ kṛtam iti cet, nanv evaṃ simandharabhaṭṭārakasya aśeṣārthasākṣātkāriṇaḥ tīrthakarasya syāt / tena hi prathamam “anyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim / nānyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim //” ity etat kṛtam / katham idam avagamyate iti cet, pātrakesariṇā trilakṣaṇakadarthanam kṛtam iti katham avagamyate iti samānam, ācāryaprasiddheḥ ity api samānam ubhayatra / kathā ca mahati suprasiddhā / tasya tatkr̥tatve pramāṇamāṇye (pramāṇābhāve) tatprasiddhau kaḥ samāśvāsaḥ, tadarthaṃ karaṇāt tasyeti cet, tarhi sarvaṃ śāstraṃ tadavi[bhi]dheyaṃ ca ata eva śiṣyāṇām eva na tatkr̥tam iti vyapadiśyeta / pātrakesariṇo 'pi vā na bhavet, tenāpi anyārthaṃ tatkarāṇāt tenāpy anyārthaṃ iti na kasyacit syāt / テキストは刊本に従っており、Kailāścandra Śāstri が提示したものと相違がある。
- 21) テキストは刊本に従っている。Kailāścandra Śāstri の提示したテキストとは相違がある。
- 22) アカランカが自身の作品中で sādharmyasama / vaidharmyasama について説明しているか否かについては、現在のところ不明である。SVin の第5章は Jalpasiddhi (Vādasiddhi) 章と名付けられ、論難を扱うが、管見の限りでは sādharmyasama などについての説明はない。
- 23) ヴイドゥヤーナンディンは『プラマーナ・パリークシャー』において “tathoktaṃ” として anyathānupapannatva 韻文を引用したのち、これを次のように改変して五条件説を批判している。See PP, p.72: anyathānupapannatvaṃ rūpaiḥ kiṃ pañcabhiḥ kṛtaṃ / nānyathānupapannatvaṃ rūpaiḥ kiṃ pañcabhiḥ kṛtaṃ //
- 24) 『シッディ・ヴィニシュチャヤ・ティーカー』刊本の Mahendrakumār Śāstri の序文におけるパートラケーサリンについての考察については、志賀[2003: 61-62]に纏められており、その脚注も含めて参照されたい。
- 25) 同一人物説を取らない従来研究のうち、志賀[2003]で言及されないものには次のような研究がある。See Jain, D.[1949], Jain, J. P.[1964], Śāstri, K.[1966], Śāstri, N.[1974: Vol.2]. ただし、Śāstri K. [1966]におけるパートラケーサリンについての考察は、ほぼ Śāstri K.[1938]を踏襲している。

- 26) Dramila サンガは、空衣派の中でも正統派であった Mūla サンガとは異なり、非正統派 4 サンガ (Drāviḍa, Yāpaniya, Kāṣṭha, Māthura) のうちの一つである。デーヴァ・セーナの『ダルシャナ・サーラ』によれば、Dramila (Drāviḍa) サンガは、プージャ・パーダ (Pūjyapāda : 『サルヴァ・アルタ・シッディ』作者) の弟子であるヴァジュラナンディンによってヴィクラマ暦526年に創始されたと言う (Glasenapp[1925: 355-356]; Wiley[2004: 82])。ヴァジュラナンディンとパートラケーサリンの前後関係は確定できないが、同系列の出家者集団であったことは確かであろう。
- 27) JŚLS3, 305, Belūr (Śaka Saṃvat 1059), pp.7-8.
- 28) 碑文テキストは10詩節以上に亘るので、ここでは割愛する。JŚLS1, pp.192-194を参照されたい。
- 29) スマティについては、Bhaṭṭācārya[1926: lxvii-lxviii]、Śāstri, K.[1966: 25], Śāstri, N.[1974: Vol.2, 446-447]を参照せよ。Bhaṭṭācārya はスマティを670-720 A.D.とし、パートラケーサリン (700 A.D.) との関係には言及しない。Nemicandra Śāstri は『タットヴァ・サングラハ』および Candragiri 碑文に基づき、7 - 8 世紀とする。
- 30) Mahendrakumār Śāstri は、アカランカによってシャーンタラクシタが批判されているとする (Śāstri, M.[1959: 46-47.])。Kailāścandra Śāstri はブラジュニャーカラグプタやアルチャタなどのダルマキールティ注釈者たちとアカランカの前後関係については、アカランカが先行すると考えている (Śāstri, K.[1938: 97])。そしてシャーンタラクシタについては、1938年の論稿では触れず、後にアカランカがシャーンタラクシタに先行もしくは同時代であると言う (Śāstri, K.[1966: 24])。
- 31) 網羅的ではないが、次のような例が挙げられる。See TAŚV on I.20, p.239: atrākalaṃkadevāḥ prāhuḥ (LT v.10); AS, pp.116-7: tad uktam nyāyavinīścaye (NVin I. vv.53-54); AS, pp.120-1: tad uktam nyāyavinīścaye (NVin I. v.7); PP, p.69: tad uktam akalaṃkadevāḥ (LT v.3); PP, p.76: tad uktam akalaṃkadevāḥ (NVin II. v.3), SŚP, p.3: tad uktam bhaṭṭākalaṃkadevāḥ (NVin I. v.52); SŚP, p.26: tathaivoktam bhaṭṭākalaṃkadevāḥ (LT v.37); ĀP, p.198: tathā coktam akalaṃkadevāḥ (NVin I. v.52)。
- 32) 『アシュタサハスリー』では次のような例が見られる。AS, p.47: tad uktam tattvārthaślokaṃvārtike ---- (TAŚV I. 0. 14-25); AS, p.57: tad uktam tattvārthaślokaṃvārtike ---- (TAŚV I.0.10-12); AS, p.116: tathā coktam tattvārthaślokaṃvārtike ---- (TAŚV I.1.140)。
- 33) 『アーブタ・パリークシャー』では、自らの『タットヴァ・アルタ・シュローカヴァールティカ』を『タットヴァ・アルタ・アランカーラ』、『アシュタサハスリー』を『デーヴァーガマ・アランカーラ』もしくは『デーヴァーガマ・アランクリティ』と呼んでいる。See ĀP, p.233: tatrākṣepasamādhānāṃ samānatvād iti devāgamālāṅkṛtau tattvārthālāṅkāre vidyānandamahodaye ca vistarato nirṇītaṃ pratipattavyam /; ĀP, p.262: devāgamatattvārthālāṅkāravidyānandamahodayeṣu ca tadanvayasya [asmābhiḥ] vyavasthāpanāt, alaṃ prasaṅgaparamparayā, atra samāsatas tadviniścayāt /。
- 34) Upadhye[1974: 28]を参照。Mahendrakumār Śāstri はこのブラバーチャンドラを『ニャーヤクムダチャンドラ』や『プラメーヤカマラマールタンダ』の作者であるブラバーチャンドラと同一人物と考えている (Śāstri, M.[1941: 65-66])。彼は、ブラバーチャンドラを980-1065年頃と推定しており (Śāstri, M.[1941: 58])、ジャヤシンハ王 (1055年即位) と同時代人と考えて何ら支障はない。しかしながら、Upadhye は (1) Mahendrakumār Śāstri が根拠とした『プラメーヤカマラマールタンダ・ティッパナカ』のコロフォンが元テキストとの混合により疑わしいこと、(2) 同名の著者が当時かなりの数存在したこと、(3) 『カター・ブラバンダ』と他の論理学作品では言葉遣いなどに相違が見られること、などから同一著者であることを疑っている (Upadhye[1974: 29])。なお、Jagadīścandra Jain もほぼ同じく、ブラバーチャンドラを980-1055年とする (Jain, J.[1994: 115])。
- 35) 著者アナンタヴィールヤの年代は、Śāstri, M.[1959: 90]による。
- 36) 著者ヴァーディ・ラージャの年代は、Śāstri, M.[1959: 51]による。

- 37) 著者ブラフマネーミダッタは、西暦1575年に『カター・コーシャ』を、1585年に『シュリーパーラチャリタ』および『ネーミナータプラーナ』を著作したと言われている。Śāstri, N.[1974: Vol.3, 403]を参照されたい。なお、Jagadīścandra Jain は彼を16世紀の人物とする (Jain, J.[1994: 115])。
- 38) アナンタヴィールヤが教条主義的伝統を重んじる人物であったことについては、Śāstri M.[1959: 70-72]を参照されたい。
- 39) ヴァーディ・ラージャがアナンタヴィールヤを知っていたことは、Śāstri M.[1959: 81]を参照せよ。
- 40) ブラフマネーミダッタがブラパーチャンドラの『カター・プラバンダ』に忠実に追従し、韻文化したことは、Upadhye[1974: 11-20], Jain, J.[1994: 115]を参照されたい。空衣派のカター文献の伝統では、その殆どが『バガヴァティー・アーラーダナー』(Bhagavati Ārāḍhanā)の伝統に従っており、各説話の内容や記載順序も『バガヴァティー・アーラーダナー』に従っている。しかしながら、パートラケーサリン伝、アカランカ伝、サマンタバドラ伝については、ブラパーチャンドラ以前には見られない。したがって、ハリシェーナの『カター・コーシャ』や『バガヴァティー・アーラーダナー』などはパートラケーサリン伝を欠いている。このようなカターの伝承については、Śāstri, K.[1978: 37-38], Jain, J.[1994: 114-124]を参照されたい。なお、Upadhye[1974: 12-15]には『カター・プラバンダ』と『バガヴァティー・アーラーダナー』の韻文との対照表が示されている。
- 41) 『カター・コーシャ』では、『アープタ・ミーマーンサー』において推理の特質については述べられていないことが記述されている。See ĀKK, v.32: tattvajñānaṃ pramāṇaṃ ca proktaṃ tattvārthavedibhiḥ / lakṣaṇaṃ nānumānasya bhāṣitaṃ tac ca kīḍṣam // (そして真実を知るお方(サマンタバドラ)によって「ブラマナーとは、真実に関する知である」と述べられているが、推理の特質は述べられていない。ならば、それはどのようなものか?)。
- 42) 例外的に、Nemicandra Śāstriはこの作品について若干の解説を加えている。第1, 6, 11, 27詩節についてヒンディー語による解説をなし、またこの作品では'saṃgacchate'や'virudhyate'などのĀtmanepada動詞形が頻出することから、パートラケーサリンが様々な論者の見解を考察して自身のものとして消化していることを指摘している。Śāstri N.[1974: Vol.2, 240-243]を参照せよ。
- 43) Darbārīlāl Jainはこの作品をパートラケーサリンの作とし(Jain, D.[1949: 25])、Nemicandra Śāstriもこれに従う(Śāstri, N.[1974: Vol.2, 240-241])。P. M. Josephは、パートラケーサリンの『パートラケーサリ・ストートラ』(別名『ジネーンドラ・グナ・サンストゥティ』)とヴィドゥヤーナンディンの『パートラケーサリ・ストートラ』(別名『プリハット・パンチャ・ナマスカーラ・ストートラ』)の二作品があるという(Joseph[1997: 312b])。ただし彼は、K. Bhujabali Sastry, *Samskṛta-vāṇmayakke Jaina-Kavigaḷa Kāṇikke*. Mudubidire, 1971. pp.47-8.に従ったと述べており、誤解である可能性が高い。Bhujabai Sastryの論稿については、筆者未見。
- 44) 『カター・プラバンダ』は、次のような『バガヴァティー・アーラーダナー』の韻文(第1, 2詩節)を引用して開始される。See BhĀ, vv.1-2: siddhe jayappasiddhe cauvvihārāḥaṇāphalaṃ patte / vaṃdittā arahaṃte vocchaṃ āraḥaṇaṃ kamaśo // ujjovaṇaṃ ujjavaṇaṃ nīvahaṇaṃ sāhaṇaṃ ca ṇiccharaṇaṃ / dāṃsaṇaṇāṇacarittatavāṇaṃ āraḥaṇā bhaṇiyā // (世界でもよく知られている、14種のārāḍhanāの果報を得た完成者たち、つまりアルハットたちに敬礼した後、私は[その]ārāḍhanāを順番に述べよう。そして、ārāḍhanāとは、正しい信仰(dāṃsana)、正しい知識(nāṇa)、正しい行為(caritta)、苦行(tava)について、それらを明らかにすること(ujjovaṇa / Skt.: uddyotana)、それらに専心すること、それらを捨てないこと、それらを完成すること、それらを全人生で体現することである。)。この韻文の引用の後、Samyaktvodyotanakathā, Jñānodyotanakathā, Cāritroddyotanakathāというように、上記の様々なārāḍhanāを順番に物語として語るのである。
- 45) 'samyaktva'という語を正しい信仰(samyagdarśana)と翻訳したのは、前注に示した通り、第1話が

「信仰を明らかにする（外に示す）」というトピックであることに基づく。また、‘samyaktva’ という語そのものについて、ジャイナ教の様々な論者たちは ‘samyagdarśana’ と理解している (Williams[1963: 41ff.]を参照)。

- 46) 刊本では次のようにダンドを挿入している。ĀKP, p.2: tattvajñānaṃ ca pramāṇam anumānalakṣaṇam /. これを『カター・コーシャ』に従って訂正する。注41を参照せよ。
- 47) 『カター・コーシャ』によれば、この ‘atra’ という語は ‘jinaśāsana’ と理解できる。See ĀKK, v.31cd: jivājivādikam vastu prameyam jinaśāsane /

(うの ともゆき：日本語・日本文学科 准教授)